

『恋愛免疫不全症候群』

著: 春原いずみ

ill: 水名瀬雅良

嵐はよく晴れた夏の朝にやってきた。

「おはようございますっ！」

杉崎の出勤は早い。彼は車で通勤しているが、朝のラッシュで道路が混むのを避けるために、朝の七時にはだいたい職場にいる。車を所定の場所に駐め、私服から白衣に着替えるために、いつもなら誰もいないはずのロッカー室を開けた瞬間だった。

「お、おはようございます」

良く響く声に頬(ほお)を引っぱたかれて、彼らしくもなく、杉崎は目を見開いたまま、立ち尽くしてしまった。

「この病院、ロッカー室が別にあるんだね。だいたい医局の隅(すみ)っこにある病院が多いから、探しちゃった」

「だんだん医者が増えて、医局が手狭になってしまったので、ロッカー室をここに移したんです……」

答えながら、杉崎はこれはいったい誰だと考えていた。

長身である。櫻居とほとんど変わらないほどの目線の高さなので、百八十センチ台の半ばといったところだろう。体つきはしっかりと骨太な感じで、すらりと頭身は整っているが、身体フレームが欧米人ぽい。顔立ちはやや大作りで、すべてのパーツがはっきりくっきりとした、少し暑苦しいともいえる濃い顔立ちだ。しかし、いつも微笑んでいるような口元に愛(あい)嬌(きょう)があって、可愛らしい感じもする、若々しい青年の顔だった。

「あ、申し遅れました。俺、今日からここに来ることになった形成の御原と言います」

良く響くいい声だ。杉崎は彼を見上げたまま、答えた。

「僕は整形の杉崎です。オペ室でお会いすることもあるかと思いますが、お見知りおき下さい」

“これが問題の天才児殿か”

「え、整形の先生？」

ロッカーを開けかけていた彼の手が止まっていた。

「本当に？」

「嘘を言っても仕方ありません」

杉崎は淡々と答える。

「一応、整形外科医長ということになっています」

「え、ホントに？」

二回言った。思わず杉崎は笑ってしまう。羽織っていた薄手のジャケットを取って、着ていたTシャツの上からケーシーと呼ばれる短白衣を羽織って、ボタンを留めた。

「はい」

ロッカーの内側から『整形外科医長 杉崎聡』のネームプレートを取り出して、白衣のポケットに留める。

「本当だ……いや、ごめん。ちょっとびっくりした」

屈(くつ)託(たく)なく笑って、御原は言った。

「俺の知ってる整形外科医って、だいたいごついのが多いから」

「そうですか。それは認識不足ですね」

ロッカーを閉じて、杉崎は振り返った。

「ここにこうして、その規格外がいます」

「規格外か」

御原が笑う。

「先生って、おもしろいね」

「そうですか？」

杉崎はさらさらとした素直な髪をかき撫(な)でながら、長身の形成外科医を見上げる。

「おもしろみのない人間とよく言われますが」

「そうなの？」

御原はにこにこしている。いきなりのタメ口には驚いたが、見る限り、櫻居に聞かされたような変人とは思えず、屈託のない明るい感じの青年医師だ。ちらりと視線を落とすと、その指は意外なほどほっそりと長く、いかにも器用そうで、形成外科医として最適と言っていい、美しい指だった。

「え？」

御原はふっと黙ってしまった杉崎の視線の先を追い、ああと頷(うなず)いた。

「俺の手、そこだけ別もんでしょ」

にこっと笑い、御原はすっと手を上げ、滑(なめ)らかに手入れの行き届いた指で、軽く杉崎の頬を撫(な)でる。それは不意打ちのスキンシップだった。身を引く間もないまま、杉崎は御原の柔らかい体温を感じる。

「え……っ」

「全然痛くないでしょ？ 俺の手」

御原の指がすると杉崎の頬を撫(な)で、またふっと離れていった。

「先生のほっぺもすべすべだね。男の人の肌じゃないみたいだ」

「何を……っ」

「俺、仕事柄、いろんな肌に触れるけど、先生みたいにきれいな肌した人、あんまりいないよ」

彼の手は滑(な)らかで柔らかく、とても繊細だと思った。言葉つきのラフさとのギャップ。

「俺の手はいろんな肌に触れる。いろんな傷にも触れる。だから、それ以上傷つけたり、痛い思いをさせたりしたくないから、手だけはね、いつもきれいにしておかないと」

そう言い終わると、彼は照れたようにくるとロッカーに向き直り、さっとTシャツを脱いだ。良く日に焼けた小麦色の滑(な)らかな背中。少しウエストを落としたパンツのせいで、腰のくびれまでくっきりとわかる身体は、見事なまでに鍛えられ、シェイプされた美しい身体だった。彼はざっと濃いブルーの術衣をかぶり、さっさとズボンも穿(は)き替えてしまう。恐らく、病院側に頼んで、ロッカーに用意しておいてもらったものなのだろう。このまま、すぐオペ室に入れる姿だ。

「もう……オペの予定が入っているのですか？」

思わず尋ねた杉崎に、御原は振り返り、癖のある髪を簡単に撫(な)でつけながら答えた。

「予定は未定」

「え？」

「予定できるオペばかりじゃないから。いつでも、オペ室に飛び込めるようにはね、してる」

「オペ室に飛び込める……」

「着替えてる間に、いろいろできることあるでしょ。俺、その時間がもったいなくてさ」

杉崎はオペ室以外では基本的に術衣を着ないことにしていた。

医師は、当直時に寝間着と仕事着を兼ねて、術衣を着るものが多い。しかし、そんな時でも、杉崎は絶対に術衣を着ない。杉崎にとって、ブルーのごわつく術衣は特別なものだった。肌にひりひりと痛いような術衣に着替え、髪をざっとかき上げることで、杉崎は自分を作る。オペ室という現実から隔絶された別世界で闘う人格に作り上げるのだ。

オペ室は非現実だ。人間が人間の身体を切り裂き、内臓や骨を露出させていく。人間が人間の呼吸を止め、時に心臓の動きも止める。

医学部の実習生を受け入れることがたまにあるが、初めてのオペ室見学で倒れるものが一人や二人は必ず出る。それほど、オペ室の内部は衝撃的だと言える。そこに立つものとして、杉崎は自分を現実と切り離す、一種の祭(さい)祀(し)服として、術衣をまとうのだ。

“人の考えはいろいろと違うものだな”

さらりと素直な髪をかき上げて、杉崎は御原に振り向いた。

「院長にはお会いになりましたか？」

「うん、まだ。こんな時間にまだ来てないでしょ？ 偉い人は」

「院長はご出勤が早いです。もう見えられているはずですから、ご案内しましょう」
先に立って、杉崎はロッカー一室を出た。

本文 p21～27 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>